

# 社会で求められる力を育てる 日本語学習活動についての実践報告

中野友理

## 1. 実践の概要

韓国のある中等教育機関において、第二外国語教科として開講されている日本語科目の授業で、日本文化理解及び将来彼らが社会で求められる力の育成を目標として学習活動を試みた。本稿では、まず本実践を行うきっかけとなった報告者の問題意識を述べた上で、本学習活動の企画の過程、そして本学習活動の流れを述べる。その後、学習活動終了後に生徒に行ったアンケートからこの学習活動の成果を考察する。

## 2. 実践の背景

### 2.1 社会の変化

2018年の世界経済フォーラム (World Economic Forum) で発表された「仕事の未来 (The Future of Jobs)」によると、2025年度までに全仕事量の半分以上はロボットによって行われ、人間に求められるスキルや役割も現在とは大幅に見直されるという。劇的に変化する社会を若者たちはどのように生き抜いていくのか、中等教育機関の日本語教師がこれから社会へと出ていく生徒たちにできることは何か、という問題意識が本実践の出発点である。

外国語教育において社会で求められる力を養おうという流れは日本や他国でもみられる。国際文化フォーラム (2012) は、実社会における問題を解決しようとする活動を外国語教育に取り入れることの重要性を示唆している。東南アジアの中等教育ではキー・コンピテンシーや21世紀スキルといった能力育成を積極的に推し進めており、これは日本語を含む外国語教育でも当然育むべきものと考えられている (国際交流基金日本語国際センター 2015)。

### 2.2 韓国中等教育機関における日本語教育

韓国では、日本の学習指導要領に相当する2015年改訂教育課程 (韓国教育課程評価院 2015) において、第二外国語科目「日本語 I」の目標を「意思疎通のための基本表現を理解し、状況に合わせて活用する」「日本文化の理解を通じて世界市民としての意識を養う」「多様な媒体と資料を活用して情報交流能力を育て、状況に合わせて活用する」(原文韓国語。報告者訳)としている。「文化理解教育」の実践はそれ以前から、李 (2009) や金 (2012) などが報告して

いるが、現状としては金(2012:74)の指摘したような、「学習者は自分が接したメディアから受けた第一印象や断片的なイメージだけで、日本社会・日本人全体を一般化する傾向」が未だにあるようである。「日本語」科目の目標の一つである「日本文化の理解を通じて世界市民としての意識を養う」というのは、どのような学習活動で達成できるのか。

### 2.3 問題意識

報告者は、韓国中等教育機関の外国語教育においても、これから生徒たちが生きる社会で必要となる能力やスキルを育成するような学習活動をデザインしたいと考えた。しかし、社会で必要とされる力は多様であり、日本語の授業でどのような力を育成すべきかは、学習者や各教育現場における日本語教育の位置づけによって異なるだろう。日本語教育の目標とされる異文化理解能力も社会で必要とされる力の一つにしばしば挙げられる。しかし、日本文化の知識を得れば異文化理解が達成されるわけではない。日本文化の理解を通じて世界市民意識をどう身につけるかは、明らかではないのである。

報告者は、韓国の某高校で日本語科目を履修する生徒を対象とし、現職日本語教師(以下、担当教師)とともに上記の問題意識に取り組もうと、学習活動の目標及び評価基準を作成、日本語科目における学習活動を実践することとした<sup>(1)</sup>。

## 3. 学習活動計画

### 3.1 本実践の場

本実践は、担当教師が勤務する芸術系高校の1年生を対象として行われた。この芸術系高校では1年生全員が第二外国語教科として週2コマ(1コマ50分)の日本語科目を履修することが必須となっている。生徒の中にはアニメやマンガ、ゲーム等がきっかけで日本文化に興味を持つ生徒もいるが、日本語自体に興味のある生徒は少ない。本実践は10月下旬から11月にかけて行われたが、これ以前の日本語の授業で生徒たちは、ひらがな、あいさつ、自己紹介、形容詞文などを教科書に沿って学習した。

### 3.2 学習活動目標

まず報告者は、この実践で生徒たちがどんな力を駆使し、何を達成できるかという点を担当教師と話し合った。お互いの持つ問題意識の他、学習活動に充てられる時間の制限等、報告者と担当教師の挙げた本実践における課題は以下の三つにまとめられた。

- ① 芸術系高校の生徒である彼らが、将来社会で必要となる力は何か。
- ② 異文化理解を促進する学習活動とはどのようにデザインすべきか。
- ③ 本学習活動に充てられる時間内にできる活動は何か。

上記を踏まえ、私たちは学習活動の目標として表1の二つの能力の育成を目指すこととした。

表1 本学習活動で目標とする力

目標とする力	目標に取り入れた理由
協働力	生徒たちは将来多くの創作活動を協働作業で行うはずだが、学校では個別の技術を磨く活動が多く、生徒たちの協働力が十分に育成されないため。
	本学習活動を決められた期間で効率的に進めるため。
論理的説明力	ある日本文化の背景にあるものを探求し、それを他者にわかりやすく説明するため。

### 3.3 学習活動内容

学習活動は、上記の学習目標となる力を活用できる内容となる。報告者と担当教師は、過去の学習活動の反省<sup>②</sup>や活動期間等を考慮し、「日本文化探求」という活動を計画した。生徒たちは数名のグループで、日本文化に関する「なぜ」で始まる疑問文をテーマとして設定し、これを解決するために調査をするという活動である。詳細については4章で述べる。

### 3.4 評価

報告者と担当教師は上記の学習目標に従って評価内容を作成し、生徒たちの意見も聞いた上で表2を完成させた。表2の評価対象「2. 報告書」で論理的説明がなされていたかを評価する。また、「4. グループ参加度」ではグループ活動における協働が行われていたかどうかを評価する。評価者はいずれも担当教師である。

表2 評価内容

評価対象	評価ポイント	評価基準
1.計画書 (10点)	制限時間内の提出	指定時間内に指示された内容を完了して教師に提出したか。
2.報告書 (40点)	内容の論理性	テーマについて論理的な説明がなされ、説得力があったか。
	その他	文書作成の規定（編集、誤字脱字、分量など）に沿っているか。
3.発表 (20点)	伝達力	自身の発表内容を十分に理解し、それを聞き手にわかりやすく伝達できたか。
	その他	規定（構成、発表時間など）を守った発表であったか。

4. グループ 参与度 (20点)	①計画書提出までの 参与	計画書作成時、グループ活動に参加したか。
	②学習活動全体で の役割	学習活動において自分の役割を果たしたか。
	③共同作業の責任	※上記①、②に該当しない生徒がいたグループは他のメンバーも減点する。
5. 提出 (10点)	期限内の提出	報告書、発表資料を期限内に提出したか。

### 3.5 本実践で確かめたいこと

表2に基づいた評価結果をもとに、本学習活動で目標とされる力を生徒がどの程度活用したか分析したいところではあるが、担当教師による生徒評価の結果は学校外部に持ち出すことが許されなかった。そこで本報告では、学習活動後の生徒のアンケート回答、また学習活動中に報告者や担当教師が観察した生徒の様子をもとに、以下の二点についての考察を5章で述べる。一つは、生徒自身が日本文化について調査し、他生徒と調査報告を共有することで、日本文化をより理解しようとする姿勢が見られたかどうかである。もう一つは、日本語の授業で、将来社会で必要とされる力を活用することに生徒は意義を感じたかどうかである。

上記の一つ目は、韓国の教育課程における目標に準じた「日本文化理解」の実現を確かめるものである。二つ目は日本語科目において日本語運用能力ではない、スキルの活用を目的とする学習活動を生徒たちがどう受け止めたか確かめるものである。

## 4. 学習活動「日本文化研究」

### 4.1 学習活動の流れ

本学習活動では約三週間で4～5コマ（200～250分）の教室活動が使用された。

表3 学習活動「日本文化研究」の流れ

コマ	内容	生徒の活動成果
1	学習活動「日本文化研究」の説明（担当教師） 2～4人のグループ作り	グループ決定
2	テーマ決定における注意（担当教師） テーマを決定するための話し合い、情報収集（グループ活動）	テーマ決定

社会で求められる力を育てる日本語学習活動についての実践報告

3	報告書の構成についての指導、文献引用に関する注意(担当教師) 報告書の内容についての話し合い、情報収集(グループ活動)	報告書の内容決定
報告書準備期間(約一週間)		
4 (~5)	グループ発表 報告書の提出	発表 報告書

1コマ目は、担当教師が本学習活動の目的、目標、流れ、注意事項などを書いたプリントを生徒に配布し、本学習活動全体の説明を行った。生徒たちは2~4名で構成されるグループを自分たちで作ることとしたが、一部の生徒は担当教師と相談した上で1名、あるいは5名で本学習活動を行うことを了承された。

2コマ目は最初に担当教師が今日の流れの説明をした後、ほぼグループでの活動を行った。この時間に生徒たちは「なぜ」で始まる疑問文をテーマとして設定し、グループの各メンバーの役割を書いた計画書を授業終了時まで担当教師に提出することが求められた。生徒グループが選んだテーマは以下のようなものであった。

表4 生徒グループが選んだ学習活動テーマ(抜粋)

題材	生徒グループの設定した具体的なテーマ
祭り (4グループが選定)	「なぜ日本は祭が発達したか」 「日本人はなぜ祭に積極的に参加するか」など
お化け、妖怪、怪談 (4グループが選定)	「なぜ日本はお化けを題材にした映画が多いか」 「なぜ日本は妖怪文化が発達しているか」など
コスプレ (3グループが選定)	「なぜ日本はコスプレ文化が発達したか」 「西洋で発達したコスプレがなぜ日本で流行したか」など
コンビニ (2グループが選定)	「なぜ日本と韓国でコンビニの質が違うか」 「なぜ韓国で日本のコンビニが知られているか」
猫 (2グループが選定)	「なぜ日本人は猫が好きか」 「なぜ日本には猫のキャラクターが多いか」
デザート (2グループが選定)	「なぜ日本にはデザートが多いか」 「なぜ日本はデザート産業が発達したか」
文房具 (2グループが選定)	「人々はなぜ日本の文房具を使うか」 「なぜ日本の文房具は競争力があるか」
J-POP (2グループが選定)	「なぜJ-POPは韓国で成功しなかったか」 「なぜ嵐は今でも人気があるか」

その他の題材 (23 グループ)

風呂文化、老舗、アニメ、漫画、近代文学、サブカルチャー、天皇、自転車など

3コマ目も担当教師から報告書の構成、参考資料の検索方法などの指導を受けた後は、生徒たちが各グループで情報検索や報告書作成を行った。

本学習活動を行った1年生は全部で8クラスであるが、どのクラスにも2コマ目か3コマ目の授業に日本語ネイティブが3名ほど教室を訪れ、生徒たちが必要とすれば活動を手伝った。彼らは国際交流基金ソウル日本文化センターがソウルおよび釜山で募集し、主に韓国中等教育機関の日本語学習活動をボランティアで支援する「日本語サポーター」<sup>⑧</sup>である。本学習活動では日本語サポーターが生徒の情報検索を手伝ったり、生徒からの日本に関する質問に答えたり、個人的な感想や意見を聞かれれば率直に答えたりした。本学習活動に協力した日本語サポーターは合計8名（女性6名、男性2名）で主婦、大学生、社会人と背景は様々であった。

3コマ目終了後の約一週間後、4コマ目の授業で生徒たちは報告書を提出し、授業では各グループが5分から10分の発表を行った。

#### 4.2 活動後のアンケート

本学習活動終了後、生徒全員に対してアンケート調査を行った。アンケート内容は以下のとおりである。詳しい質問内容及び集計結果は稿末の資料を参照されたい。

- ① グループでの活動に対する評価（「よかった／まあまあ／よくなかった」の3段階評価及び自由記述欄）
- ② 評価基準の適切さ（「適切だった／適切でなかった」の2段階評価）
- ③ 活動時間の適切さ（「長かった／適当だった／短かった」の3段階評価）
- ④ 成果発表を行ったことへの感想（多項選択）
- ⑤ 今回の発表を通して成長したと思うこと（多項選択）
- ⑥ 日本人ボランティアが訪問したことへの評価（「役に立った／まあまあ／役に立たなかった」の3段階評価及び自由記述欄）
- ⑦ 一連の活動で最も難しかった点（多項選択）

#### 5. 考察

本実践で確かめたいこととして3.5に記した二点について生徒のアンケート回答、および学習活動中の生徒の様子をもとに考察する。

### 5.1 生徒に日本文化をより理解しようとする姿勢が見られたか

報告者と担当教師は、生徒が単に日本文化の知識を獲得するだけでなく、その意味や背景に関心を持ってほしいと本学習活動を計画した。しかし生徒の約半数は本学習活動について「多様な日本文化について知識を得た」とアンケートで回答した。彼らが他生徒の発表から得たものは知識であり、その論理性や信ぴょう性まで意識したようなコメントはなかった。生徒たちにとってある情報の信ぴょう性を疑ったり、文化の背景まで考えたりすることが難しかったことは、本学習活動の一番難しかった点として「テーマ設定」と答えた生徒が最も多かったことからわかる。生徒たちは日頃多くの情報をメディアから得ているものの、これらをさらに分析することは少なく、「なぜ」と問うことは慣れない作業であったのかもしれない。

上記に関連して、担当教師がある生徒（以下、生徒 A とする）と直接会話した内容も記す。生徒 A は、韓国の対日議論で話題になることの多い「独島」（日本名「竹島」）について、「なぜ日本は独島を自分達の領土だということなのか」という疑問をグループで調査した。調査中、生徒 A は日本の外務省による資料に初めて目を通したという。生徒 A は担当教師に「自分の知る事実と相反する情報があることさえ知らなかった」と驚きながら述べたそうである。

報告者も、生徒が自分自身の思い込みに自ら気づく場面に幾度か遭遇した。ある生徒グループが「なぜ日本人は猫が好きか」というテーマで調査をするつもりだと言うので、彼らに「本当に日本人は猫が好きなのか？」と尋ねた。すると彼らは驚いた様子で「日本人が必ずしも猫を好きでないと初めて知った」と答えた。彼らは別の日本人にも意見を聞いた上で、最終的にテーマを「なぜ日本では猫のキャラクターが多いか」と改め、招き猫やキティなどを調査した。このように一部の生徒は、これまで彼らが持っていた日本に関する知識を問い直すべきだと気づいたことがわかる。しかし、多くの生徒は自身の知識のどの部分を問い直すべきかさえ難しかったようであった。

### 5.2 生徒は日本語能力以外の力の活用に意義を感じたか

本学習活動では協働と論理的説明を学習の目標に含め、評価にも取り入れた。この点に対して生徒がどのように考えたかアンケート結果から考察した。結果として、多くの生徒は必ずしも協働力や論理的説明力の活用、成長を意識しなかったようである。

#### 5.2.1 生徒は協働力の活用に意義を感じたか

本学習活動において、生徒にはグループでの協働を求めて評価項目の一つとした。生徒のアンケート回答からは、グループでの作業に概ね満足している反応が多かったものの不満も見られた。あるコメントには「グループになることで自分自身が関心を持っていたテーマを扱うことができなかった」とあり、また「ある生徒のせいでグループ評価が低くなるのは嫌だ」とい



うグループの連帯責任への不満も複数あった。担当教師と報告者は、本学習活動にグループ活動という形での協働力の発揮が本当に必要だったかを振り返った。調査テーマを自由に設定できるという、学習者の探求心を引き出す活動であるはずが、生徒から「本当に調査したいことができなかった」という不満を生じさせたためである。協働することを生徒に求めるならグループ作業としてではなく、例えば個人での調査であっても学習活動中に相互フィードバックの時間を設けるなど、別の方法で取り入れたほうが相互の学びあいにより効果的にできたかもしれない。

一方で、グループ活動を高評価し、「協力の仕方」を自身の成長として挙げた生徒がいたことも確かである。全体的には共同作業と役割分担のおかげで、限られた時間内で成果を出せたグループが多かったようだが、相互の学びあいなど協働力のさらなる成果がどの程度あったのかは本学習活動で分析できなかった。

### 5.2.2 生徒は論理的思考力の活用に意義を感じたか

アンケートでは生徒が論理的説明力を意識したような回答、コメントはほとんどなかった。実際に自分たちの考えを論理的に説明した発表あるいは報告書はあったが、彼らの主張の根拠となる情報の出典が曖昧であったり、信頼度の低いものであったりする場合が多かった。彼らの情報の出典として特によく見られたのが、誰もが投稿可能な動画サイトであった。報告者と担当教師は、生徒たちの情報収集及び分析のスキルは十分だろうと予想していたが、そうではなかった。一方で、生徒グループの中には、限られた時間内で論理的な説明ができる調査をするためにはどうしたらいいかを担当教師あるいは日本人と相談し、「仮説を立てて検証する」という方法で調査、結果を報告した者たちも複数見られた。

以上のように、多くの生徒たちは本学習活動で「多様な日本文化を知った」という意義は感じたものの、結果的に協働力、論理的説明力の活用を意識した者は少なかった。しかし、アンケート回答にははっきり表れなかったものの、生徒の中には学習活動中の担当教師、あるいは日本人との対話の中で日本文化に対する自分の理解を見直す者や、論理的説明をしようと調査方法を検討する者もいた。

## 6. まとめと課題

本稿では、韓国の芸術系高校の日本語科目授業において異文化理解の姿勢や協働力、論理的説明力の育成を目標とした学習活動を企画、実践した試みを報告した。あくまで韓国の教育課程に従った上で、芸術系高校の生徒が将来社会で求められる力は何かを考えて学習目標、評価項目そして活動内容を作成した。学習活動終了後に実施したアンケートにおける生徒の回答からは、この学習活動で多様な日本文化の知識を得たという認識は多く見られたが、協働力や論



## 社会で求められる力を育てる日本語学習活動についての実践報告

理的説明力の活用について意識した生徒は多くなかった。しかし、日本文化に対する自身の思い込みへの気づきや、論理的説明を意識して調査を工夫する生徒の様子は確認できた。

本学習活動を終えて、報告者は改めて「日本語科目とは何を学ぶべきか」「教師とは何を教えるべきか」という点を考えた。「日本語」科目の目標はあるものの、日本語を学ぶ過程で生きていくために必要な力を成長させることは「中等教育」の重要な役割と指摘され、韓国のみならず他の国でもその取り組みは盛んである。日本語教師もまず「中等教育機関の教師」であり、生徒たちが社会で必要とする力を成長させられるよう自身の担当する授業を設計することが求められている。さらに、中等教育における外国語教育の重要性を、生徒やその保護者、及び教育関係者に知ってもらうためには、外国語教育が「外国語」を学ぶためだけでなく、異文化理解をはじめとする誰もが社会で駆使しなければならない能力・スキルを養成するのに適した教科であることを実践によって知らせる必要もある<sup>(4)</sup>。しかし、「日本語」授業において生徒が社会で求められる力をどのように育成するべきか、本学習活動の実践ではわからなかった。ただ一つのヒントは、本学習活動中に担当教師が発する「批判的な質問とコメント」によって、生徒が自分自身の持つ認識に気づいたり、視点を変えてみたりしたということである。今後も中等教育における日本語を教えるだけではない「日本語」授業については、実践報告や教師の具体的な役割についての分析と考察が必要である。

### 〔注〕

- <sup>(1)</sup>本報告は担当教師が多忙であることから報告者1名による執筆となった。尚、本実践については担当教師も別の機会に報告をする予定であるが、互いの執筆内容については確認をしている。
- <sup>(2)</sup>担当教師は本学習活動の前年、同じく勤務校での日本語授業において「自分が関心のある日本文化について調べる」という課題を生徒たちに与えて学習活動を行ったが、生徒が一人で日本文化を調べて報告することは負担だと感じたという。また同じ活動で、生徒がメディアの情報をそのまま写して報告し、情報分析や批判的考察があまり行われなかったことについても担当教師は残念に思ったということで、本学習活動では以上を考慮した。
- <sup>(3)</sup>「日本語サポーター」については、国際交流基金「世界の日本語教育の現場から」(2016年度)においてソウル日本文化センター派遣専門家が紹介している。
- <sup>(4)</sup>韓国では2011年に中等教育機関における第二外国語が必須科目から選択科目へと変更された。このように中等教育における第二外国語の位置づけは国ごと時代ごとに変化し、結果的に必須科目または試験科目としての安定した存続が難しいという現状がある。

### 〔参考文献〕

- 韓国教育課程評価院 (2015) 『2015年改訂教育課程』教育部告示 第2018-162号
- 金美珍 (2012) 「韓国における日本文化理解授業の試み—学習者間の相互作用を中心に—」『日本言語文化研究会論集』8、73-102
- 国際交流基金「世界の日本語教育の現場から (国際交流基金日本語専門家レポート) 在韓邦人の力を借りて」<[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/higashi\\_asia/korea/2016/](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/higashi_asia/korea/2016/)>

report01.html> (2019年9月2日)

国際交流基金日本語国際センター (2015) 『21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育における日本語教育—各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト—』 独立行政法人国際交流基金 日本語国際センター

国際文化フォーラム (2012) 『外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言—』 ココ出版

李垠叔 (2009) 「韓国的一般系高校の日本語授業における「文化理解教育」の提案—学習者主体の教室活動に向けて—」 『日本言語文化研究会論集』 5、111-138

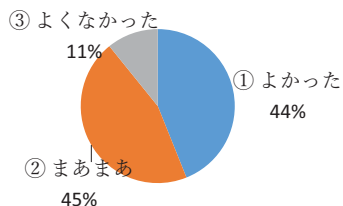
World Economic Forum 「The Future of Jobs Report 2018」 <<https://www.weforum.org/reports/the-future-of-jobs-report-2018>> (2019年9月2日)

資料1 学習活動終了後に生徒に行ったアンケートの集計結果

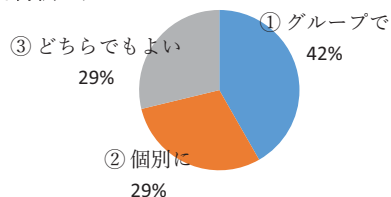
「日本文化研究」（2018年2学期）終了後アンケート回答全体集計（日本語訳）

回答数 151名

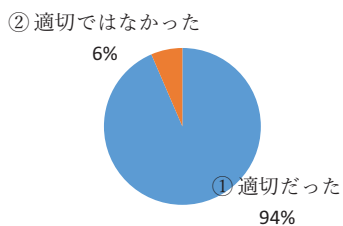
1. グループでの活動はどうだったか



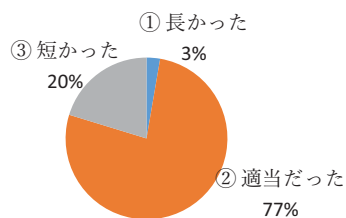
またこのようなテーマを行う場合、  
どのような方法ですとよいか



2. 評価の基準は適切だったか

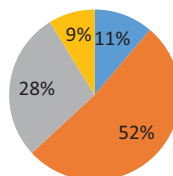


3. この学習活動に配分された時間は適切だったか

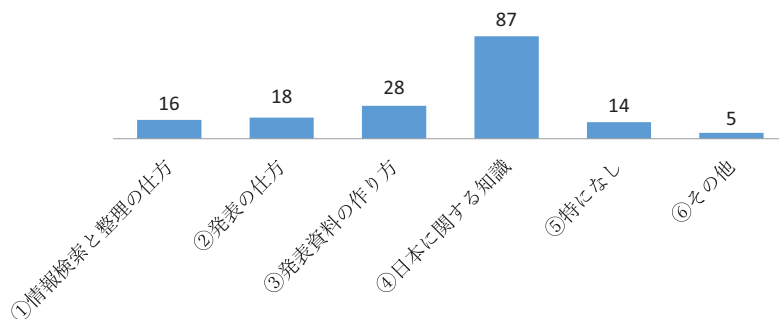


4. 発表形式の授業はどうだったか

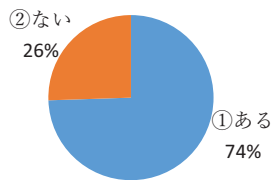
- ① 教師の授業より興味深くおもしろかった
- ② 多様なテーマに触れることができよかった
- ③ 教師の授業と学生の発表どちらもよい
- ④ あまり役に立たない



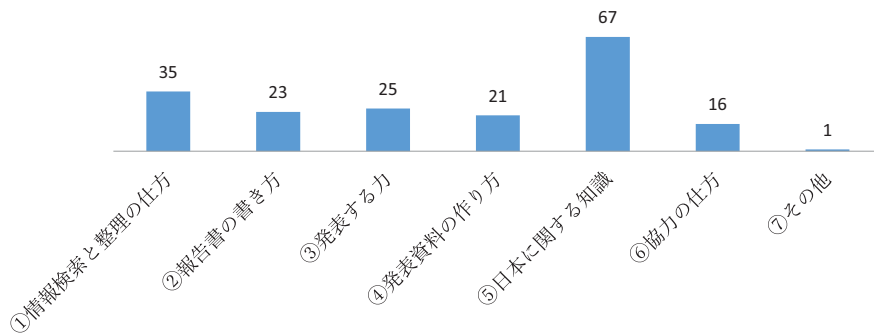
他の人の発表を聞いて参考になった点は何か（複数回答）



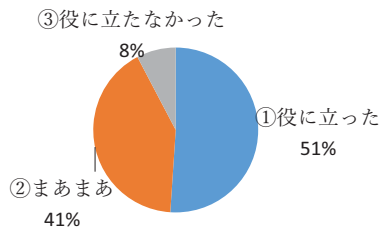
5. 今回の発表を通して成長または向上したところはあるか



どんな点が成長したか (複数回答)



6. 日本人の訪問は役に立ったか



7. この活動で最も難しかった点は何か

